

(整理番号：)

活動の名称	タヨウナイノチ ツナガルズリュウガワへ サクラマスヲカセンカンキョウノシヒョウトシテ 多様な命 つながる九頭竜川へ ～サクラマスを河川環境の指標として～		
記入年月日	活動主体 (下記より1つ選択)	分野 (複数選択可)	
	学校 企業 <input checked="" type="checkbox"/> 団体 個人 行政	水防災・水資源・水環境・水文化・復興	
活動主体の概要			
活動主体の名称 (個人応募の場合は個人名)	フリガナ サクラマス・レストレーション		
代表者名 (団体の場合)	ヤスダ リュウジ 安田 龍司	設立年月日	会の設立 平成20年2月1日 (活動開始年 平成15年)
住所			
電話		FAX	
E-mail			
主な活動地	九頭竜川とその支川		
組織の概要 (個人の場合は履歴を記入)	サクラマスが遡上する福井県・九頭竜川の河川環境に魅せられ九頭竜川に通い続け、また河川環境の変化に気づき、何か行動を起こそうとする全国の熱き想いの釣り人達(フライ・フィッシャー)が主体となった活動グループです。		
応募担当者 (代表者と違う場合記入して下さい)			
氏名	アマヤ ナミ 天谷 菜海	所属：	役職：
住所	〒		
電話		FAX	
E-mail		URL	
応募活動の概要： (300文字以内で記入して下さい)	<p>サクラマスは九頭竜川に生息する魚類の中で最も生活範囲が広く、河川全体の環境が健全でなければ命を繋ぐことができません。そのため河川環境の指標種として最適です。</p> <p>サクラマスの生息数を回復させるためには、河川の連続性や河床などの環境改善が重要で、多様な生物が生息する「豊かな川」の再生に繋がると考えます。私達は「生き物目線」で創意工夫を凝らし、様々な活動に取り組んできました。漁協、大学、行政、地域住民と連携のもと、多くの人達が九頭竜川に愛着を持って、水環境への意識を高めていけるような活動を目指しています。</p>		
応募活動のアピールポイント： (箇条書き100文字以内で記入して下さい)	<p>気象や海洋環境などの影響も受けますが活動開始以来、九頭竜川のサクラマスの遡上数は、約3倍～5倍に回復しました。大河川の活動においては、非常に稀な成果と言えます。</p>		
これまでの受賞歴：	平成22年6月 環境省「水・土壌環境保全活動功労者表彰」		
「日本水大賞」をどこで知りましたか？ (数字に○印を付けて下さい)	<p>1. 新聞広告 2. 官庁内ポスター 3. 協会ホームページ 4. 協会からの誘い</p> <p><input checked="" type="radio"/> 5. 国の機関からの誘い 6. 県・市町村からの誘い 7. 教育関係機関</p> <p>8. その他 ()</p>		

活動の概要**目的：**

九頭竜川は、幹川流路延長116km、流域面積2930km²で福井県面積の70%を占める北陸地方屈指の大河川である。蛇行する流れ、深淵、伏流水そして自然の攪乱による河道変化は、多様な生物の命を育ててきた。春、雪代の清冽な流れを割って、日本海から白銀に輝くサクラマスが遡上する。サクラマスは溪流魚ヤマメの降海型で、海の栄養を蓄え最大で70cm、5kg程に成長する。秋に故郷の川の上流で産卵すると約3年の命を閉じる。

1980年代後半、フライ・フィッシングによる、大型で美しく神秘的なサクラマスを対象とした釣りは、九頭竜川を舞台にその道具が開発されノウハウが確立されてきた。そのため九頭竜川は「サクラマス釣りの聖地」と呼ばれるようになった。当会の安田代表もその開拓者の一人で、30年間九頭竜川に通い、釣りを通してサクラマスの生態を学んだ。そんな中、河川環境の変化とそれに伴うサクラマスの減少を目の当たりにした。全国から九頭竜川に集まる仲間達と結成された当会の活動目的は、永く釣りを楽しみたいからでは決してない。「いつまでもサクラマスが帰ってくるような九頭竜川を、日本の川として未来に残したい」という思いからであり、多くのサクラマスが回帰する河川は実に貴重であると考え。多様な生態系を健全に維持できる「豊かな九頭竜川」を未来に受け渡すために、活動を通して流域に住む人達や訪れる人達が九頭竜川に愛着を持ち、水環境への意識向上に寄与することが活動の目的である。

内容：

①河川の連続性の改善、支川での産卵のための河床環境の改善

- (1) 鳴鹿大堰魚道の流量調整等に関する提言 (2) 河床環境の改善、人工産卵場の造成
(3) 行政、漁協との協働による人工産卵床ユニットの設置、簡易魚道の製作と設置

②サクラマスの遺伝的固有性を守る種苗生産と放流

- (1) サクラマスを釣りにより採捕・搬送（漁協より放流される稚魚の親魚とする）
(2) サクラマス親魚の蓄養・人工授精・F1及びF2の種苗生産等の全面的な協力

③サクラマスの遡上・産卵などの調査

上流の各支川において産卵床のサイズ、水深、流速、水温、水質、重複産卵の有無などを調査するほか、その他の魚類、水生昆虫なども毎年調査し、関係する行政、漁協に提供。

④地域の子どもの環境学習・体験学習

- (1) 永平寺町内の全幼稚園児が年長の年に、漁協の行うサクラマス稚魚の放流会に参加。当会では水環境やサクラマスの生態を、紙芝居などを使いわかりやすく説明している。
(2) 地域の小学校の総合の学習等で、サクラマスを題材にした環境学習を行っている。発眼卵の配布、飼育、観察を行い、近くの支川に放流するまでの全面的サポート。

⑤プロジェクトへの参画（実績）

- (1) 福井県立大学 「九頭竜川プロジェクト」
伝えよう！味わおう！九頭竜川の食文化
～郷土料理を通して九頭竜川への環境への意識を高めよう～
(2) 福井市 森田公民館 「サクラマスサミット」（継続中）
(3) 岐阜県 石徹白川 フィッシャーズホリデー「在来渓魚ワークショップ」

⑥講演会、フォーラム等の講師、パネリスト（実績）

- ・福井市 ・勝山市 ・坂井市 ・越前市 ・鯖江市 ・永平寺町
・福井県自然保護センター ・日本ビオトープ管理士会福井県支部 ・大本山 永平寺
・乗鞍岳と飛騨の自然を考える会 他 多数

活動期間 自 2008年 2月 ～

上記の期間以前から一部の活動を実施していた場合はその期間と内容を下に記入してください。

2003年より開始していた活動内容

一部の支川と本川における産卵状況調査。九頭竜川への環境保全への啓発活動。

活動の必要性・緊急性：

江戸時代の文献によると、九頭竜川流域ではサクラマス漁が盛んに行われ、川漁師を生業とする家が多くあった。今の20倍ものサクラマスが遡上していたのではないかとされている。

人々が川に近づかなくなると、川に無関心になる。無関心だと川の大切さが分からない。家の横を流れる小さな川、田畑をうるおす農業用水、蛇口をひねると流れ出る生活の水・・・それらすべてが九頭竜川と繋がっているということすら意識しなくなってしまった。川で生き物と、友達のように遊んだ世代は、年々少なくなっている。すっかり世代が入れ替わってしまう前に、少しでも川に愛着を持てる子ども達を増やすことは、緊急を要することである。サクラマスだけではなく、昔から命を繋いできた多様な生き物のことを知り、河川環境への意識を高めることが必要である。

活動の効果・社会への波及効果：

活動を始めた頃、地域においてアユは誰でも知っていたが、サクラマスの認知度は非常に低かった。行政より沢山の委員に委嘱され、講演会の講師に招かれ、その度に声を上げてきたことや、多くのメディアに私達の活動を取り上げてもらえたこともあり、地域は元より県内の人達がサクラマスのことを知るようになった。特に子ども達との放流会や環境学習は、サクラマスを介し大人達も九頭竜川のことを学習し関心を持つという効果があった。

サクラマスの生息数は活動を開始してから、約3倍から5倍に増えた。これは気象や海洋環境などの影響もあるが、鳴鹿大堰の魚道の流量調整により河川の連続性が改善され、上流での自然再生産が増えていることに加え、他の河川由来の稚魚ではなく遺伝的固有性を守る種苗生産、九頭竜川の環境に合わせた適正放流に切り換えたことによる効果が大きいと考えられる。

また地域では、サクラマスや九頭竜川をテーマにしたフォーラムが、継続して行われるようになり、社会への波及効果は大きい。

活動を実施する上での留意点、工夫された点、苦労された点：

協働や連携の場において必ずアイデアを出すということ。そして、自ら行動に移すということ。自然が相手であるので、活動は天候や川の状況に大きく左右される。川だけではなくサクラマスは、海の状況にも影響を受ける。当会は、その年ごとにどう行動したらよいかを判断し、柔軟に対応し、たえず先導を続けてきた。特に30年間、九頭竜川に立ち続けて得た豊富な経験と知見が、大いに活かされていると考える。

活動の今後の計画：

まず基本となる活動を継続し、今後もデータを蓄積することで、サクラマスの生態をより詳細に解明しハビタットの保全につなげていきたい。特に調査は範囲を拡大し今後も充実させていきたいが、専用の機材は、補充するにも維持管理にも費用がかさむのが難題である。

より多くの子ども達に、九頭竜川の生き物に関心と興味を持ってもらうために、環境学習や体験学習も今まで以上に創意工夫をこらし、時間と身体の許す限り多くの小学校を廻りたいと考えている。

また九頭竜川のサクラマスが増えたという実績から、他県も含めた他河川において、サクラマスを増やしたいという要望があれば、できる限り情報を公開しネットワークを築きたい。

応募推薦者（必要な場合にご記入ください）

氏名		推薦の言葉：
所属		
電話		
氏名		
所属		
電話		

添付資料①



人工産卵場造成（支川）



人工産卵床ユニットの設置（支川）



簡易魚道の製作と設置（支川）



福井県立大学と共同で産卵床調査（支川）



釣りによるサクラマス親魚の採捕
傷つけないよう専用のビニール袋に入れる



仲間と協力して素早く車まで運ぶ



福井県内水面センターで蓄養する

添付資料②



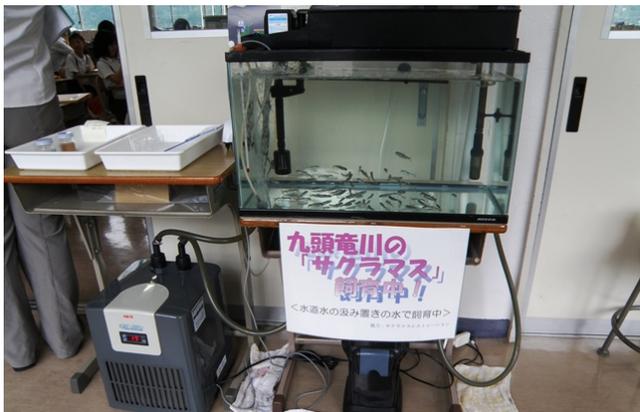
サクラマスの卵



サクラマスの稚魚



サクラマス稚魚の放流会 永平寺町内の幼稚園児を招いて放流前に紙芝居でお話をする



小学校の環境学習 発眼卵を配布し子ども達が観察しながら育て、近くの支川に放流する。



小学校の学習発表会



産卵に帰って来たサクラマスの観察会

川と生きる ①

サクラマス生息する九頭竜川

人と自然 つながるふくい

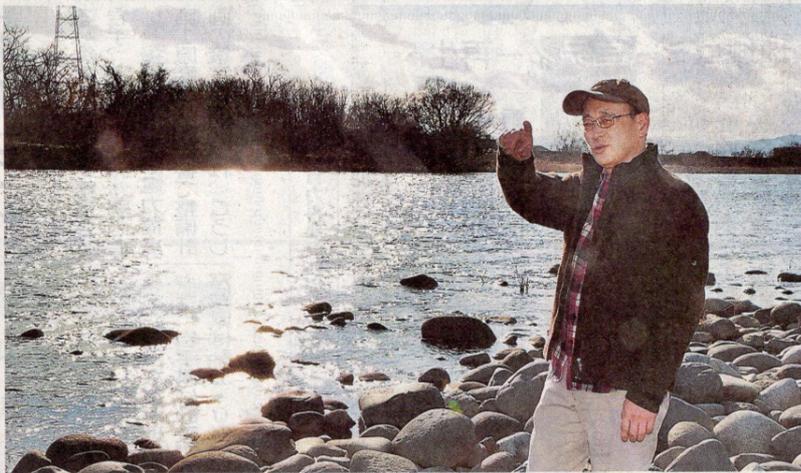
サクラマスの『聖地』九頭竜川にさおが並んだ。1日に釣りが解禁され、ことしも全国から太公望が集まっている。銀白の輝く魚体は、大きいもので長さ70センチ、重さ5キログラムを超える。

聖地の保護 釣り人動く



司さん(52)は名古屋市が、目を細めた。川岸では釣り人同士が気さくに交流し、情報交換している。魚と九頭竜川、両方の魅力が合わさり多くの人を引きつけている。

上流域から河口まで広範囲に生息し、海も旅するサクラマスは環境の大きな指標になる。安田さんは30年近く前に九頭竜川を初めて訪れて以来、自宅との行き来の道中で上流域までの様子を見た。いくつものダムや堰があり、所々で護岸工事が行われていた。「長良川と比べると水質が悪く水量も少ない。よくサクラマスがいるなど不思議だった」



「福井にはすごい川があって、すごい魚がいると多くの人に知ってほしい」と話す安田さん＝永平寺町の九頭竜川河口

地道に活動 好環境へ道

けたきっかけは、支流の一つの永平寺川で撮影されたサクラマスの産卵シーンだった。十分に川底を掘れないまま産

サクラマス サケ科で、川などで生まれ、海に下って成長する「降海型」の魚。一生を川で過ごす「陸封型」はヤマメと呼ばれる。生まれた稚魚は川で1〜2年育った後、海に下りて1年ほどオホソク海付近まで回遊する。サツキマス(マゴ)は同じサケ科でよく似ているが、ヤマメは日本海側と太平洋の東北の河川に生息するのに対し、アマゴは太平洋の関東以南と瀬戸内海に注ぐ河川にいる。

卵するため、すぐに卵がウグイスに食べられていた。「サクラマスや九頭竜川を調査したために九頭竜川で釣れた親魚から採卵し、稚魚を育てて放流するサイクルができてきた」と思

最初に永平寺川を調査した時、仲間は3人だった。人工の産卵場を造った時は10人以上が集まった。次の年の参加者は20人を超えた。「生き物としてのサクラマスに関心を持つ釣り人が予想以上にたくさんいた」

多くの構造物で遮られた遡上環境も大きな問題だった。特に永平寺町の鳴鹿大堰の下には、最大で約300匹がたまっていた。管理する国などに魚道を流れる水量の調整を提案し、大堰にとどまる魚は50匹足らずになった。

自分たちの思いを知ってもらうため、何度も足を運び、少しずつ話をした。まずベテラン漁師が耳を傾け、県立大学の若手研究者らも活動に加わった。団体で行った産卵場の調査結果を提供し、行政とも連携が深まっている。

いま、固有の遺伝子を守る「コウノトリ支局・西脇和宏」は「人と自然 つながるふくい」は今回で終了します。